

研究課題	ダルクにおける若年薬物依存者の「立ち直り」支援と生徒指導への応用可能性の検討		
氏名	伊藤 秀樹	所属	総合教育科学系 講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講		<input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること	
<p>【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>本研究の目的は、薬物依存者を対象とした民間のリハビリテーション施設であるダルクが、若年層の利用者の薬物依存やその他の犯罪からの「立ち直り」に対して、どのような支援実践を行っているかについて明らかにすることであった。そして、それらの支援実践が逸脱行動を繰り返す中学生・高校生への生徒指導にどのように応用できるのかについて比較検討を行った。</p> <p>研究方法としては、まず、これまでに定期的に参与観察や利用者・スタッフへのインタビュー調査を行ってきた3つのダルクにおいて、ミーティング、エンカウンター・グループ、当事者研究といったプログラムの参与観察を改めて実施した。また、若年薬物依存者にとってのダルクのプログラムの意義や、実践上の留意点について、3つのダルクのスタッフへのインタビュー調査を行った。</p> <p>調査から見出されたことは以下のとおりである。ダルクでは、薬物依存からの「回復」（「立ち直り」）の過程を支援するために、NAの12ステップを「回復」の指針とし、「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングを中心としたプログラムを日々行っている。そして近年では、参加者内で対話とフィードバックが行われるエンカウンター・グループや、参加者が抱える問題を外在化しその成り立ちについて研究する当事者研究などのプログラムも導入されるようになってきた。</p> <p>ただし、スタッフへのインタビューからは、若年の薬物依存者に上記のプログラムを行うにあたって、以下の2点の課題が指摘された。1点目は、ダルクの利用者に若年の薬物依存者が多いと、何人かで「群れ」（グループ）を作ったり、パワーゲームが起きたりするということである。そうした事態が生じることで、若年の利用者たちが「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングでも正直に自分の話をするができず、「回復」に向けた自己物語の再構築の取り組みに悪影響が出ることがあるという。2点目は、そもそも人生経験（＝物語資源）が少ない若年の薬物依存者には、「回復」の指針である12ステップの理念がしっくりこないことがあるということである。</p> <p>これらの指摘をふまえると、ダルクのプログラムを生徒指導へと応用することには、以下の困難があることが示唆される。同じ年齢の人々ばかりが集まる学校（とくに学級集団）では、「群れ」化やパワーゲームが生じることを前提に置かなければならない。そうすると、自己物語の再構築のために正直に本音を話すことが求められるミーティングや、参加者が抱えている課題を正直に話すことが求められるエンカウンター・グループや当事者研究は、想定通りには機能しない可能性が高い。もし導入するのであれば、共通の目的・課題を持ち、「群れ」やパワーゲームが見られないような小さな集団の中で、実施していく必要があるだろう。また、若年者の人生経験の少なさ、すなわち自己物語を再構築したり問題を研究したりするときの物語資源の少なさにも配慮しなければならない。</p> <p>調査結果から見出されたのは、残念ながら、ダルクにおける薬物依存者の「回復」に向けたプログラムを学校での生徒指導に応用することには、かなり慎重にならなければならないという結論であった。ただし、ダルクの研究としては、若年の薬物依存者に「回復」支援を行ううえでの特有の困難を明らかにできたという意義があったと考える。</p>			
<p>【研究成果発表方法】</p> <p>研究成果の一部は、昨年10月に香港で行われた国際会議（The 1st Asia Regional Meeting of the International Society for the Study of Drug Policy）で口頭発表を行う予定であったが、台風で香港行きの飛行機が欠航になり、発表をキャンセルせざるをえなかった。そのため、内容をブラッシュアップして今年6月にスウェーデンで行われる国際会議（The Stockholm Criminology Symposium）にて口頭発表を行う予定である。</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。